

過疎地域で 前向きに活動する僧侶の特徴

高野光拓

<はじめに>

厚生労働省(2024)は、日本人の2023年の出生数は72.7万人(概数、前年比▲5.6%)、合計特殊出生率は過去最低を更新する1.20であったことを公表した。日本総研(2024)は、この数値は国立社会保障・人口問題研究所が23年4月に公表した将来人口推計の中位推計を下回り、先行きも中位推計から大きく下振れして推移する展開となることが懸念されると指摘している。

また、内閣府(2024)によると令和5年10月1日現在、総人口に占める65歳以上人口の割合(高齢化率)は29.1%。75歳以上人口の総人口に占める割合は16.1%。令和52(2070)年には、2.6人に1人が65歳以上、約4人に1人が75歳以上になるとの予測を立てている。

日蓮宗の現状に目を移せば、令和6年10月時点での寺院数は5087カ寺、教師数は7517名(住職4034名、非住職3483名)である。日蓮宗が長期的な宗門の未来像を策定する「日蓮宗グランドデザイン」のために立案された『日蓮宗長期総合計画提案書』(2024)では、人口動態や経営的試算を踏まえ、ここから20年後の寺院数を3500カ寺、教師数を6400人と推定している。

これに対し筆者は、世代ごとの20年生存率と信行道場の平均修了者数等を参考に計算し、今から20年後にあたる令和26年の教師数を5135人。そして、ここ

(22) 過疎地域で前向きに活動する僧侶の特徴（高野）

表1：これまでの寺院・教師数

	全国寺院 結社教会数	教師数	住職数	非住職数	代務/兼務/欠員 (寺院数-住職数)	住職・非住職 の比率
昭和60年	5268	7736	4538	3198	730	0.70
平成10年	5228	8009	4446	3563	782	0.80
平成21年	5181	8236	4299	3937	882	0.92
平成30年	5146	8015	4172	3843	974	0.92
令和6年	5087	7517	4034	3483	1053	0.86

* 寺院名簿並びに寺院僧籍課データ参照

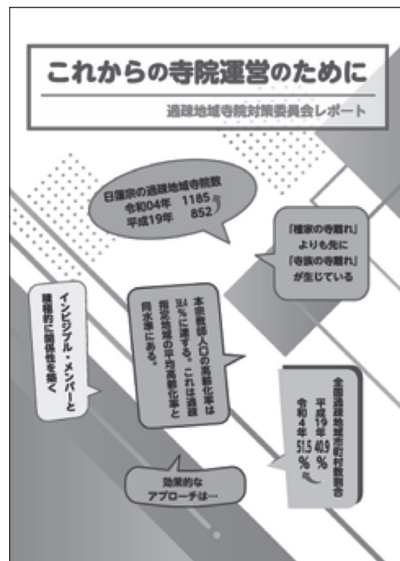
表2：20年後の寺院・教師・代務予測

	全国寺院 結社教会数	教師数	住職数	非住職数	代務/兼務/欠員 (寺院数-住職数)	住職・非住職 の比率
令和26年						
筆者予測	4900	5135	3671	1464	1229	0.40
宗務院予測	3500	6400	—	—	—	—

40年間の減少率から寺院数を4900カ寺、住職数を3671人と推定した。それをまとめたものが次の表1、表2である。

この表を見ても分かるとおり、教師数の減少は加速している。新たな教師を生み出す「手立て」を打たなければ、この傾向に歯止めはかからず、更に加速していくことは明らかである。

これらの少子高齢化や後継者不足を背景とする過疎地域の問題は、檀家の減少による経済的な問題も含め、すでに目の前の困難として顕在化している。原(2008)によると過疎の問題は、国会においては昭和41年、日蓮宗に於いては昭和38年より宗会での指摘があり、かなり早い段階から注目されていた。現代宗教研究所においても昭和42年より随時調査が行われ、平成元年には『こまできている過疎地寺院、あなたは知っていますか』が発行されている。



その後、伝道部所管にて「過疎地寺院対策懇談会（平成2年～平成12年）」、「過疎地域寺院活性化検討委員会（平成18年～令和2年）」、「過疎地域寺院対策委員会（令和2年～令和5年）」と過疎問題へのアプローチが継続されてきた。

これらの委員会で模索されてきたのは、どのような手法や努力が寺院の活性化に役立つかであり、そのための先行事例の紹介（『元氣な寺づくり読本』・『日蓮宗宗報』での事例紹介）や、アイデアの募集（アイデアコンペ）、講習会（活性化講習会）を通しての気づきの促しなどがなされてきた。これらの取り組みには、ある一定の反応がある一方で、「反応するのはまだ経済的に余裕がある寺院であり、本当に支援の手を届かせたい、経済的に困窮している寺院には響かない」という現実も明らかになっていった。この問題意識に対応するために「支援員」の制度も試行されていたが、必要な技能を持つ人材がなかなか見つからないこと、研修制度を上手く構築できなかったことなどから、広がりを見せることなく立ち消えている。講習会や支援員などの臨床支援ともいえる

(24) 過疎地域で前向きに活動する僧侶の特徴（高野）

取組に見えるのは、モチベーションや将来への展望など、教師一人ひとりの心にアプローチしていく姿勢である。組織の構成メンバーの「寸心」に訴えかけることが強い宗門を作っていくための道筋の一つでもある。

この発想から、本論では今回は令和元年9月に行われた、石川県第二部宗務所管区の現地調査のデータを用い、どのような要因が教師それぞれの積極性や動機付けに影響を与えるのかを検討してみたい。なお当分析は、仮説を予め立てた上での分析（仮説検証型）ではなく、仮説を立てるために模索していく形（仮説探索型）の分析となる。

<方法>

石川県第二部宗務所管区34カ寺の内、訪問の上聞き取り調査を行った28カ寺分の内容を元データとして扱った。

まず、聞き取りを行った調査員それぞれの対象寺院への「印象」をアンケート

表3：調査員へのアンケート

	質問項目	そう思わない	どちらかと言えば そう思わない	どちらかと言えば そう思う	そう思う
項目1	この寺院（教師）は楽しんで（楽しそうに）物事に取り組んでいる	1	2	3	4
項目2	この寺院（教師）は変化を積極的にとりいれている	1	2	3	4
項目3	この寺院（教師）は次世代にバトンを渡すことに前向きである	1	2	3	4
項目4	住職（調査対象者）はこの寺院の将来について	問題意識を持っている		このままでも大丈夫だと思っている	
項目5	この寺院（教師）が積極的か消極的かを判断するとしたら	積極的（前向き）である		消極的（諦めがち）である	

トにて聴取し、消極的（諦めがち）か積極的（前向き）かの判断を行った。

項目1～3は「そう思わない」から「そう思う」の4件法で、合計得点が高い方が積極的と判断し、項目4・5との整合を確かめた。また、解答が主観的印象のため調査員3人の平均を求めることで客観性をもたせるよう工夫した。

結果、9カ寺を消極群、18カ寺を積極群と定義した。

現地調査で聞き取られた内容には、調査対象者の年齢や家族構成、年間行事、伽藍の様子など300を超える項目があった。この項目の中から積極性（前向きさ）に影響を与えそうな要因を30項目程度に絞り、説明できる形を模索するための分析を加えていった。しかし、要因が多すぎて妥当な解釈が難しかった為、更に削りながら複数パターンの分析を試行し、最終的に階層的クラスター分析（項目を選別しながら、距離や相関係数によってケースの類似度を求め、類似度の近い順にグループ化を行う分析）を採用することにした。（分析は統計分析フリーソフト「R」を用いた）

<分析と結果>

分析の発想として、積極群と消極群を分ける要因は膨大な数が存在するため、あたりを付けながら解釈可能なグループ分けが見つかるまで手探りで数値を代入していくような作業となった。階層的クラスター分析の結果、「年齢」「檀家数」「信者数」「檀信徒の協力性」「法縁との距離」を要因として見た場合のグループ分けが最も説明力が高いと判断し、対象の27カ寺を特徴の異なる4グループに分けることにした（詳細な分析結果は巻末の付録参照）。クラスター（CL）毎の特徴をまとめたのが次の表4である。

<考察>

上記の結果から「年齢」「檀家や信者の多さ」「後継者の存在」といった単一

(26) 過疎地域で前向きに活動する僧侶の特徴（高野）

表4：クラスターの特徴（解釈）

クラスター名 (前向きなメンバーの割合)	クラスターごとの特徴
CL1 (0/7) 檀家・信者が共に少ない 檀信徒の協力が低い群	代務寺も多く含まれており、そもそも協力し合える檀信徒自体がほとんどいない場合も考えられる。
CL2 (7/7) 教師が比較的若い 信者数が多い 檀信徒が協力的な群	教化活動によって信者が増えていくことを実感している。また、信者が次代に継承されることが保障されないことを心配する意見もある。
CL3 (5/7) 教師が比較的年配 檀家・信者が共に少ない 檀信徒が協力的な群	状況はクラスター1と似ているが、檀信徒が協力的であると捉えているところが大きく違う。
CL4 (6/6) 檀家数が多い 法縁（組寺）との距離が近い 檀信徒が協力的な群	檀家数の多さや法縁との結びつきの強さから、ある程度以上の規模で経済的にも安定している。

の条件が積極性（前向きさ）に直結しているのではなく、複合的に解釈されるべきであることがわかる。檀家が多く協力的である群（CL4）は、現時点では経済的にも安定しており前向きに取り組むことができていると言える。また、信者の獲得をモチベーションとして布教を継続できている群（CL2）もまた全員が積極的（前向き）である。

檀家や信者の数が少なく檀信徒の協力が低いグループ（CL1）は、全員が消極的と判断されている。一方、檀家や信者が少なくても、そこに協力的な関係が存在する場合（CL3）、多くのメンバーが積極的と判断されている。このグループ間（CL1とCL3）の違いに、1つの光明があるのではないだろうか。

「過疎の問題」は、人口減少、少子高齢化など大きな社会的変化に起因したものであり、また「これまで通りの生活が変化してしまう」ことへの「恐れ」

や「あきらめ」が全面に出ている言説に思える。日蓮宗の過疎に関する委員会では、経営的なアイデアや画期的な方策が万人に適応できるものではない、というところから、個々人の内面にアプローチすることが1つの道筋として検討されてきた。これは、「恐れ」や「あきらめ」などの後ろ向きの感情を制御し、「明るく」「楽しく」「積極的に」行動していく、という「人の生き方」こそが、目指していくべき寺院活性化の基盤になることを意味するのではないか。そしてそこに、関係者との良好な関係が大きく寄与しているのであれば、今ある関係に注目して丁寧な活動していくことこそが、希望となるのではないかと考える。

那須（2023）は浄土真宗の宗勢調査において、過疎地寺院の僧侶の幸福度がその他の地域と比較してあまり大きな差がなかったことを指摘している。また、幸福度を高く報告した僧侶が、門徒との関わりの中で幸せを感じており、「門徒との関係性が良好であること、同じ教えを同じ姿勢で向き合っていること」といった記述が多かったことを報告している。これは、本研究の結果とも符合するものである。因果関係までは明言できないにしても、「檀信徒との良好な関係性」が「僧侶の幸福度」や「前向きさ」などの個人内要因と高い相関があるのではないか、ということは言えそうである。

前述の通り、現代の寺院を取り巻く環境は、大きく変化をしてきている。寺院の未来を担う教師の数は減り、支える檀信徒の数も減り、寺院数そのものも減っていくことが予見される社会の中で、それでも希望を失わないために何ができるかを考えていくことが、現代に生きる僧侶には求められている。目の前の衆生に向き合い、良好な人間関係を築いていくこと。ひとりひとりの苦悩に向き合っていくことこそが、我々僧侶自身の希望や幸せにもつながっていくものと信じている。

<今後の課題>

今回の仮説探索的研究により、対象者の認知する「関係者との良好な関係」が積極性（前向きさ）に影響する一つの大きな要因である可能性を示すことができた。山家（2024）は、「積極性」と「自己効力感」との関連を検討し、特性的な積極性を「自己効力感尺度」によって測定可能であることを示唆している。今後、幸福感などを含めた概念的な整理をしながら、この知見を別の方向から確認し、よりエビデンスあるものとするための調査研究をしていきたい。

<さいごに>

石川県第二部宗務所管区の皆様には、令和元年当時の調査ご協力に対し改めて御礼申し上げます。また、同管区の皆様が令和6年の能登半島地震、奥能登集中豪雨による甚大な被害を受けられたことに、心よりお見舞いを申し上げます。どんな逆境にあっても前を向いて活動をされているお姿に、多くの人々が勇気を頂いています。一日でも早く、檀信徒と共に安心できる地域の居場所が復興されますことを、心よりご祈念申し上げます。

<参考文献>

- 原顕彰（2008）. 過疎地寺院対策一考察, 現代宗教研究, 42, 148-164
- 過疎地域寺院活性化検討委員会 編（2010）. 実践研究 元気な寺づくり読本 ～寺院活性化の事例と手引き～, 日蓮宗宗務院伝道部
- 過疎地域寺院対策委員会 編（2023）. これからの寺院運営のために 過疎地域寺院対策委員会レポート, 日蓮宗宗務院伝道部
- 厚生労働省（2024）. 令和5年（2023）人口動態統計（確定数）の概況
- 内閣府（2024）. 令和6年版高齢社会白書

那須公昭 (2023). 第11回宗勢基本調査からみた本願寺派の過疎地寺院のいま, 浄土真宗総合研究, 17, 21-41

日本総研 (2024). <少子化研究シリーズNo.10>2023年の出生数は▲5.8%減、出生率は1.20前後に低下へ, Research Eye, No.2023-084

宗門機構検討委員会内 長期総合計画策定PT (2024). 日蓮宗長期総合計画提案書, 日蓮宗宗報 令和6年11月号

山家正尚 (2024). 積極的な態度の効果と影響についての研究, 人間学研究論集, 13, 81-91

<付録：階層的クラスター分析の方法と結果の図表>

分析手法：ウォード法

距離の計算：ローデータによるユークリッド距離

分析対象数：5

サンプルサイズ：27

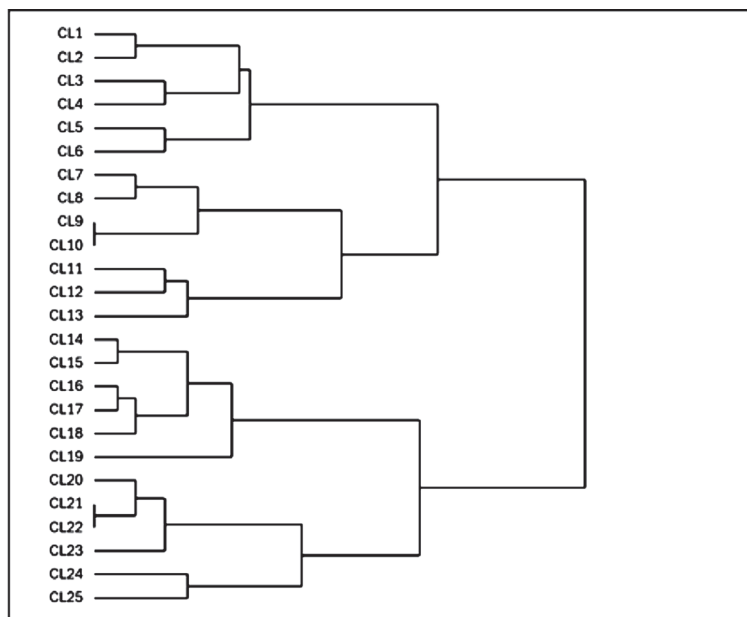


図1：デンドログラム（上位25クラスターに要約して表示）

(30) 過疎地域で前向きに活動する僧侶の特徴（高野）

表5：クラスター分析における代入の基準

年齢	1：30～40代、2：50代、3：60代、4：70代 *数値が低いほど若い年代
檀家数	1：30未満 から 7：300～500の範囲 *数値が高いほど檀家数が多い
信者数	1：30未満 から 7：300～500の範囲 *数値が高いほど信者数が多い
住職に対する 檀信徒の協力性	1：無関心 から 4：協力的 *数値が高いほど協力的
法縁との距離	総会参加や協力の度合いなど、自由記述から推測 *数値が高いほど法縁や組寺にコミットしている

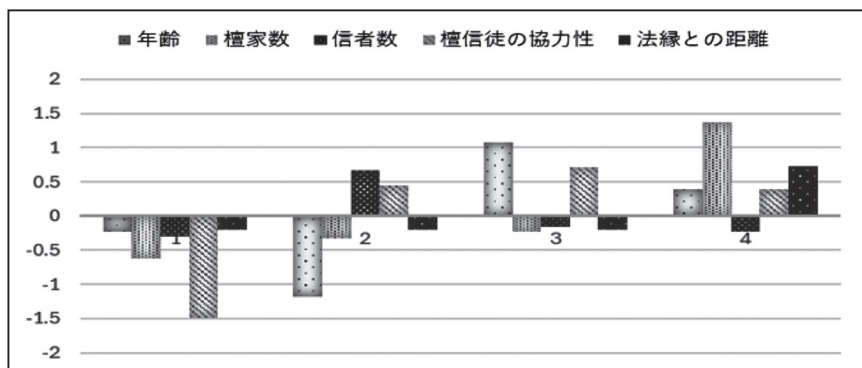


図2：クラスター毎の特徴（グラフ）

表6：クラスターの特徴（得点は標準化得点）

クラスター	前向きな寺院の数	所属メンバー	年齢	檀家数	信者数	協力性	法縁との距離
CL1	0/7	N1有代, N2有代, N3無, N4無, N5有, N7無, N9無	-0.23	-0.62	-0.31	-1.49	-0.21
CL2	7/7	P2無, P4無, P5無, P6無代, P8有, P12有, P13有	-1.18	-0.33	0.67	0.45	-0.21
CL3	75/	P1無代, P3有, P7有, P9無, P10無, N6無, N8無	1.08	-0.23	-0.17	0.71	-0.21
CL4	6/6	P11有, P14有, P15有, P16有, P17有, P18有	0.38	1.37	-0.24	0.38	0.72

* N：消極群、P：積極群、有：後継者有り、無：後継者無し、代：代務寺
* 所属メンバーの数字は通しナンバー